

話す・聞く・話し合う

今回の学習指導要領では、

「話すこと」「聞くこと」「話し合うこと」の指導事項が、それぞれ系統的に示されました。

本特集では、平成二十三年度版指導書『「話すこと・聞くこと」の授業をつくる』の監修を務められた先生方に、話す・聞く・話し合う力の大切さや、その力をどう育てていくかをうかがいました。また、授業のヒントとなる実践を三例紹介しました。

提言

いまこそ話し言葉による交流を

信州大学 教授 藤森裕治

新しい小学校学習指導要領（国語）には、「話し合う」という表現が二十五か所ある。平成十年度版では十か所だったので、二・五倍の増加である。このうち、「話し合う」「述べ合う」など、話し言葉による活動であることが明記されている記述は十一か所ある。

十一か所の「話し合う」が記述されている項目は、「話すこと・聞くこと」だけではない。例えば第三学年・第四学年の「読むこと」には、「物語や詩を読み、感想を述べ合うこと。（２）ア」とある。同じく「書くこと」には、「書き手の考えの明確さなどについて意見を述べ合うこと。（１）カ」とある。

「書くこと」「読むこと」（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）には、延べ六か所に「発表し合う」という指導事項が新設されている。「発表」の仕方には劇化や書いたものを読み合う活動もあって、話し言葉に限定することはできない。しかし、発表し合うという活動が口頭発表なし

に成立するとは、常識的に考えにくいだろう。このように、新しい学習指導要領ではすべての内容領域と指導事項にわたって話し言葉による交流が示されている。「話し合う」「述べ合う」という活動は、国語科学習の基盤を構成する、重要な言語活動なのである。

いま筆者は「話し言葉による交流」と書いたが、話し言葉による言語活動は、例外なく交流という要素を伴う。声の届く場に自分と相手がいって、情報を伝達し共有する営みが話し言葉による言語活動である。このとき、伝えようとする音声情報は話し手から聞き手へという流れをなすが、当の情報があるようなメッセージとして伝わるかは、場面の文脈と話し手・聞き手の協働性によって決まる。

場面の文脈とは、どこで、どんな目的で、どういう関係の人々がどんな手段で話し言葉をやりとりするのかという状況がもつ意味である。例えば蒸し暑い教室で先生が児童に語りかける場面と、真夏の公園で出

会った主婦同士が会話する場面とでは、「暑いですね」という言葉を発する意図や意味が異なる。

話し手・聞き手の協働性とは、話し言葉による情報の意味内容は、話し手と聞き手のやりとりによって決定するという性質のことである。先の例で、教師が「暑いですね」と言うのを聞いた児童の一人が窓を開けたとしよう。このとき、教師の言葉は「蒸し暑いから窓を開けて涼しくしましょう」というメッセージを形成したことになる。

話し言葉による交流を数多く経験することによって育まれる学習者像を一口で言うとして、「思慮深い言語主体」である。思慮深い言語主体とは、相手や場、目的に応じた言葉を用いて、自分の考えを筋道を立てて述べたり、互いの考えの共通点や相違点を考えたり、決まりを守って計画的に話し合いを進めたりすることのできる主体を指す。こうした言語主体を育てるために、いまこそ話し言葉による交流を活性化させたい。

ふじもり・ゆうじ

長野県生まれ。東京都立高等学校教師を経て、信州大学教育学部教授、教育学博士。専門は国語科教育学（授業研究、日本民俗学、NHKラジオ高校講座講師。著書に『死と豊穣の民俗文化』（吉川弘文館）、「国語科授業研究の深層―予測不可能事象と授業シスラー」（東洋館出版社）など。





「話すこと・聞くこと」Q&A

「話すこと・聞くこと」は、指導や評価が難しいとよく言われます。現場の先生方から多く寄せられる悩みや疑問に、
邑上裕子先生（新宿区立落合第四小学校）が答えします。

Q 聞くことが苦手な子が多くて困っています。

A 「耳を鍛える」指導をし、「聞く姿勢」を教えましょう。

聞く力をつけさせるためには、「耳を鍛える」指導と、「聞く姿勢」を教えることが大切です。

「耳を鍛える」ために、低学年では耳をすまして「聞きひたる」体験をたくさんさせるとよいでしょう。読み聞かせや言葉遊びなど、楽しみながらたくさん聞かせる場面を設定したいですね。中学年では、「聞



き取ってメモをする」という活動をさせます。新版の教科書には「聞き取りメモの工夫」（四年下）という教材がありますが、先生が文章を読んで、それを聞き取ってメモをするという練習をするといよいでしょう。高学年になったら、校長先生のお話など、実際の場面为主体的に聞く練習をさせます。校長先生のお話が終わった後にメモをさせて、自分はどう感じたか、自己内対話をし、書かせる指導をするといよいと思います。

それから、「聞く姿勢」を教えることも大事です。聞き手は、話し手に「聞いていますよ」というサインを送らなければいけません。低学年では、「話している人のお顔を見ながら、うなずきながら聞きましょう」と指導します。中学年では、わからないところがあつたら質問するところまでもつていきたいので、「質問があるときには、話が区切れたときにしましょう」などのルールを指導します。さらに高学年は、考えて聞く段階ですから、自分の新しい考えに結びつけられるように、質問や感想を考えながら聞くように指導します。

Q 「話すこと・聞くこと」の評価は、どのようにしたらよいでしょう。

A 話し合いをさせるときは、グループごとに、子どもたちのやりとりを丁寧に見て評価しましょう。

「話すこと」は音声が出ているので、わりと評価しやすいのですが、「聞くこと」は、子どもの内面的な動きなので評価がとても難しいですね。ですから、聞き取りメモや、聞いた後にわかったことをワークシートに書かせるなど、書くという表現におとして評価するといよいでしょう。また、話し合いの場面では、聞いた後に反応ができてい、行動ができてい、などの態度面で評価することもできます。

話し合いをさせるとき、わたしは、「今日はこのグループ、明日はこのグループ」と決めて、分割して見ていくようにしていました。話し合いには、「相手」と「場」

Q 一方的に話してばかりで、なかなか「話し合い」になりません。

A 話し合いは「受けて返す」が基本であることを、きちんと指導しましょう。

があります。子どもたちが「場の雰囲気をつくみとり、相手の話を聞いて、反応しているか」ということは、実際に教師がグループの中に入らないとわかりません。

よく、子どもたちに話し合いをさせて「どう、まとまったかな？」と、話し合った結果だけを聞いてしまいがちなのですが、大事なのは、話し合う過程です。時間はかかりますが、グループごとに、話し合いのやりとりを見て、評価に加えていきましょう。

話し合いは、「まとめていく」というよりも「つなげていく」つもりで進めましょう。

例えば、「わたしもそうなんだけど…」「へえ、そうなんだ。ぼくはね…」「違う意見なんだけど…」「なるほどね」など、子どもたちが日常的に使う言葉で、相手の話とつないでいくような言葉を事前に示してあげるといいと思います。また、話し合いの進め方をイメージさせるために、わたしは黒板に吹き出しを貼っていく、という指導をよくしました。話し合いは、「受けて返す」を繰り返してつなげていくものだから、

ということを理解させるのです。

話し合いには大きく分けて、「拡散的な話し合い」と「収束的な話し合い」があります。文学作品の読解のときは「拡散的な話し合い」になりますが、何かを決めなければならぬときは「収束的な話し合い」になります。話し合いの前に、「今日は、みんなの意見を広げていこう」、あるいは「今日は、意見を広げてもいいけど、まとめなければならぬから、話し合いのテーマに戻つたりするよ」と、話し合いの種類を、きちんと子どもたちに示していくことも大切です。

なるべく具体的なやりとりを例に示して学ばせ、子どもたちの話し合いを活性化させたいものです。



模造紙で作った吹き出しを用意しておき、パッパッと貼って、「受けて返す」話し合いの流れを示す。

むらかみゆうこ
邑上裕子

東京都生まれ。小学校教諭、立川市教育委員会指導主事、東京都教職員研修センター統括指導主事等を経て、現在、新宿区立落合第四小学校校長。東京都小学校国語教育研究会会長。文化審議会国語分科会委員。共著に「小学校国語学習指導実践辞典」（東洋館出版）など。





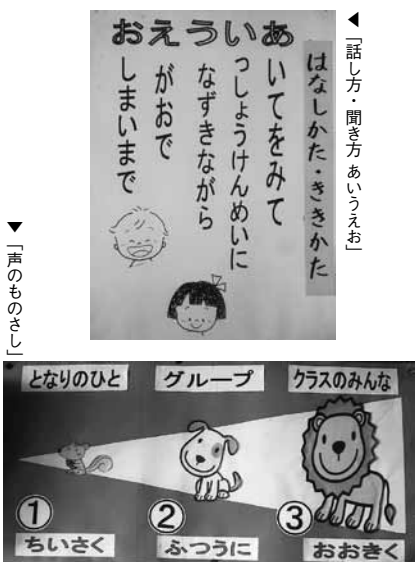
1「べいじゅ遊び」を通して学ぶ

使用教材：「ものの名まえ」「おみせやさんべいじゅ遊び」(二年下)

1 はじめに

一年生の子どもたちは、「べいじゅ遊び」が大好きである。本教材も興味関心を示すとてもよい教材である。大喜びで主体的に活動に取り組むだろう。そこで、留意しておかなければならないことは、学習のめあてをしつかりとたせ、何のための学習活動なのかということを常に教師が意識しておくことである。

本校では、学習の基本的なきまりと「話



し方・聞き方 あいうえお「声のものをさし」「発表のしかた」等、年間を通して指導している。ここでは、このような学習の基本を改めて意識させたいので、楽しく生き生きとした単元になるようにしたい。

「ものの名まえ」で、上位語と下位語を知ること、売物の概念をとらえる。それを生かして、「おみせやさんべいじゅ遊び」では、お店やさんの準備段階と本番での「聞く・話す」活動がある。実の場で「話すこと・聞くこと」の学習を促すことのできる教材である。ロールプレイ(役割演技)を取り入れることで表現力を豊かにするなど、工夫次第で尋ねたり応答したりするという言語活動を活発に行うことができる。

2 指導計画(全十一時間)

ここでの学習は、「ものの名まえ」と「おみせやさんべいじゅ遊び」の二教材を組み合わせて行う。

3 指導の実際

- 第一次**
ものの名前について知ろう(三時間)
教材文を読み、上位語と下位語について知る。
- 第二次**
「おみせやさんべいじゅ遊び」の準備をしよう(六時間)
自分たちがやりたい店や、おみせやさんべいじゅ遊びに必要なものについて話し合い、準備をする。
- 第三次**
「おみせやさんべいじゅ遊び」をしよう(二時間)
・売る人と買う人の上手な話し方・聞き方について話し合っ練習する。
・おみせやさんべいじゅ遊びをする。

第三次 第十一時
めあてをもって「おみせやさんべいじゅ遊び」をする。

4 おわりに

学習活動が熟してくると「りんごください」「はい、どうぞ。百円です」のような会話だけで終わってしまいがちであるが、「りんごを一つください」「はい。百円です」「はい。百円です。ありがとうございます。ありがとうございました」のような一往復半以上の会話を心がけたい(これらのことは、練習段階でしっかりと経験させておく)。よいやりとりをしている場面を見かけたら、十分にほめて、全体に広めるとよい。

子どもたちの学習意欲を大切に、生き生きとした学習活動にしたい。



楽しく「おみせやさんべいじゅ遊び」に取り組む子どもたち。

■めあての確認をする(十分)

前時で使用したワークシート(学習指導書一下p.117に掲載されているもの)を振り返る。

【めあての例】

はなしかた(おきやく)

- ・ていねいなことは、はなす。
- ・なにをいくつかうか、はっきりとはなす。……など。

ききかた(みせのひと)

- ・わからないことは、ていねいなことばで、たずねかえしてきく。
- ・うなずいたり、たしかめたりしてきく。
- ・……など。

前時に模造紙にまとめたものを使って、めあての確認をする。よい。活動後、ワークシートの後半に「おみせやさんべいじゅ遊び」の振り返りを書くことを予告しておく。

■おみせやさんの場を設定する

【活動場所 設定の工夫】

店は、部屋の周りにつくり、真ん中を広く空けて買い物しやすくする(下図参照)。

【その他】

売る人と買う人を区別するために、店の人はバンダナ等をつけると、なりきることができる。

■活動を振り返る(十分)

- ・めあてについて振り返り、ワークシートに記入する。
- ・感想を発表する。



2「笑点」をしよう！

使用教材：「言葉遊びの世界」（四年下）

1 はじめに

「話すこと・聞くこと」の授業づくりのポイントは、児童の課題意識の喚起であると考えられる。この場合の児童の課題意識とは、「聞き手の立場に立った話す内容や話し方をどのようにすればいいのか」という考えである。このように児童にとって必然性のある課題にまで高めることができれば、あとは教師が授業のなかでその方法を示すだけで、児童は自らの話し方を見直していくようになる。

本稿では、「言葉遊びの世界」（四年下）を取り扱う。本教材は、言葉の特質を知って、言葉遊びの文化に親しめることをねらいとしている。言葉遊びにはさまざまな種類があるが、その性質によって文字にするよりも音声にした方が楽しいものがある。そこで、本教材では「話すこと・聞くこと」を中心とした活動を行い、児童に聞き手の立場に立つ必然性をもたせる場の設定を行っていききたい。

2 指導計画（全十時間）

本実践ではテレビ番組の「笑点」の大喜利を参考に、児童が考えた言葉遊びを紹介する場の設定を行う。大喜利とは、出題者の問題に対し、それぞれの回答者がおもしろいことを言えば、座布団がもらえるという番組内のコーナーである。

大喜利には得点を増やしていくというゲーム性がある。また相手を楽しませなければ得点できないという点から、いかに相手を楽しませるか、その話す内容や話し方を検討する必要性が出てくる。

そこで、すべての児童がそれぞれの言葉遊びについて自分で考え、回答者となって学級全員の前で発表する活動の場を設定した。

- 第一次 テレビ番組「笑点」を視聴し、活動のイメージをもつ。（一時間）
第二次 教科書を読み、言葉遊びの作り方について練習する。（二時間）
第三次 各班で問題についての回答を検討

- 話し、練習する。（三時間）
第四次 学級で大喜利を行う。（二時間）
第五次 全員の考えた言葉遊びを冊子にまとめる。（二時間）

3 指導の実際

第三次 第四〜六時
各班で問題についての回答を検討し、練習する。

本学級の児童は四十名であり、四人で一グループの十グループを構成した。大喜利の問題を四問とし、各グループで一人ずつが担当として前に出ることとした。問題については、教科書に紹介されている言葉遊びから全員で話し合い、「しゃれ」「回文」あるいは「お作文」「なぞかけ」の四つとなった。まず、教師から各問題について次のような例を挙げたプリントを全員に配付した。

- ① しゃれ一つにつき、二文書きます。実際には、一文目を言った後、先生が「何だい。」と聞きます。そうしたら、二文目のしゃれを言います。
例「エジプトの人が砂ばくで言ったんだって。」「何だい。」「らくたに乗ると楽だ。」
② 回文一つにつき、二文書きます。実際には、一文目を言った後、先生が「何だい。」と聞きます。そうしたら、二文目の回文を言います。
例「大変だよ。」「何だい。」「たけやぶやけた。」
③ 自分や友だち、先生や家族の名字を使って、その人を紹介しましょう。相手が聞いて、傷ついたり、悲しくなったりする内容はダメですよ。
例「立石先生を紹介します」
立石先生の「た」、「楽しんで」。
立石先生の「い」、「いつもやさしく」。
立石先生の「し」、「しかりつけます」。
④ なぞかけ一つにつき、三文書きます。実際には、「二文目を言った後、先生が、「その心は。」と聞きます。そうしたら、三文目の答えを言います。
例「整いました。おなががいっぱいの人とかけて、宇宙と解きます。」「その心は。」「いっぴいもへんつきがありません。」

4 おわりに

次は、学習後の児童の感想である。
「わたしは、笑点といっても、ときどき見るだけであまり関心はなかったけれど、今回の授業でとてもおもしろいものだと思う



上：ふだんはおとなしい児童も元気に手を挙げる。
下：発表に聞き入る児童たち。

いました。どこがおもしろかったのかというと、…（中略）…みんなの発表のしかたがいろいろあるところ、みんなの意見がいろいろあるところなどです。
そして、わたしは人前で発表するのが苦手でした。ですが、この授業のおかげで人前で発表するのが得意になりました。また人の意見をよく聞けて、意見を言えて、先生が教えてくれた声の調子のことを生かしていききたいです。…（略）」

今後も児童が「話す・聞く」必然性を感じられるような課題意識を喚起する場の設定について実践を重ねていきたい。



使用教材：「今、わたしは、ぼくは」（六年下）

1 はじめに

目前に迫る卒業。
卒業とは「ひとり立ち」すること。
そのためにどれだけ保護者の方にお世話になったか。
時に口やかましい小言、おせっかい。
その裏側にある願いを思い描けるか。
それを思い描けることが、成長した証。
それに対し感謝できることが成長した証。
言えなかった「ありがとう」を伝えよう。

まもなく小学校を巣立っていく六年の三学期。子どもたちには、これまで育ててくれた保護者に感謝の気持ちを伝えさせ、それを保護者にも知ってもらいたい。そこで、小学校最後の参観日で、保護者に感謝の思いを伝える一分間スピーチを設定した。
しかし、思春期にさしかかる彼らには、恥ずかしさもある。そこで、単元の初めに担任として冒頭の言葉を伝え、また、堂々

と述べるからこそ、成長の証という意識をもたせる。

2 指導計画（全六時間）

第一時

三月にある最後の参観日に「一分間スピーチ大会（言えなかった『ありがとう』を伝えよう）」を行うことを決める。ここで、相手意識、目的意識をもたせる。

第二時

自分が伝えてみたいことをマッピングして、発想を広げる。

第三時

マッピングしたものから、ひとつ題材を選び、内容をふくらませる。

第四時

ペアになり、構成したスピーチを発表し合い、相互評価をしながら、加除修正する。項目をつなぐ接続語、文末を考える。

第五時

ペアになり、視線、声量、速度、間、表

情の観点で、相互評価しながら、練習し、次時の発表に備える。

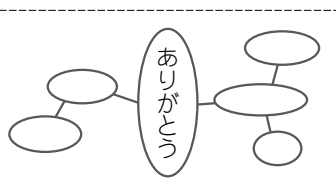
第六時

参観日に保護者の方に向けてスピーチ大会を行い、感想をもらう。

3 指導の実際

■第二時の様子から

子どもたちは、入学してから今まで、保護者に感謝する場面が数多くあっただろう。それをまず思い出させ、下のように思いついたことをマッピングさせる。



できるだけ子どもたちがたくさん書けるように、次のような観点を示しながら指導する。

- ①自分が印象に残っているものから、まず書いていく。
- ②学年を決めておき、学年別に書いていく。

③困っていたとき、悲しかったときなど自分の感情に合わせて書いていく。

④出来事に合わせて、「いつ、どこで、誰と、なぜ、どのように、そのときの会話」など、具体的なことも書き込んでいく。また、書いている児童数名に途中で発表させたり、ペアで情報交換させたりする。自由にマップを書くことで発想が活性化する子もいれば、視点を与えられることで発想が活性化する子もいる。また、具体的なシーンを示唆することで書ける子もいる。子どもたちの思考のスタイルに対応して進める。

■第三時の様子から

前時でマップに書き広げたことを整理する。さらに、そのときの保護者の気持ちはどうだったか想像し、そのときの自分の気持ちはどうだったか、それを比較して今どう思うのか、この三つを加えさせる。

保護者の行為の裏側にある思いを浮かべ、そのときの自分の気持ちと比較する。そして、感謝につなげられることは、保護者に依存している気持ちから一歩成長し、自身の思考の広がりを表すものである。このこ

▼ワークシート

時	
場所	
人物	
どんなこと	
どのように	
どうなった	
なぜ	
会話	
自分の感情	
想像する保護者の感情と理由	
比べて思うこと	

■第四時の様子から

「ありがとう」の気持ちが一番伝わる順序を改めて考え、項目の横に話す順をメモする。表の一番上と一番下、また、項目間をつなぐ言葉や文末表現を考え、そして、この順序でこの言い方で保護者には伝わるかどうかを相互評価していく。

次時の音声面での相互評価も必要だが、メモ等を参照しつつ行うスピーチでは、この段階で自然な流れができていることが肝心である。

4 おわりに

最後の参観日では、子どもたち一人ひとりが、しっかりと保護者に向けてスピーチを行うことができた。相手・目的意識が明確にあり、話す内容にも構成にも自信をもっていたことがその理由だと思う。

「話すこと・聞くこと」領域の授業が充実するか否かは、子どもがその活動に対して意味を感じ、どれだけ意欲を示すにかかっていると思う。

意欲のある、目的を明確にした言語活動を仕組み、その中で自分を見つめ、心も耕していきたいと思う。